

市民インタビュー

# 男性は仕事？ 女性は家庭？

男女共同参画社会づくりに関する市民意識調査では、男性の32.9%、女性では23.2%が「男性は仕事」「女性は家庭」という性別に固定的な役割分業に賛成していますが、実際の生活はどうか、市内在住・在学の6人の方々に話を聞きました。

自分のペースで働きたい、パステルアートの講師を始めて3年。子どもの成長に合わせて、これからも無理なく仕事の幅を広げていきたいです。

昨年、障がい者を雇用している会社のドキュメンタリーを観て、号泣したことがありました。働くことが喜びという言葉に、「私も働いて誰かの役に立ちたかったんだ」と改めて気付かされて。講師を始める前は、働いている夫の世界は広がっていくのに、育児に追われる自分の世界は狭くなるばかりと、焦っていました。家庭も大事だけれど仕事もしたい。そのバランスを取ることに私には合っているんです。

仕事で週末に家を空ける時は、夫が育児を担当。平日も洗濯するなど、私が働き始めてからは、自然に家事を分担してくれるようになりました。ただ、夫は帰宅後も仕事をする事が多いので、家では家族との時間を大切にしてもらいたいですね。

家庭と仕事の  
バランスを大切に  
したい



相羽桃子さん(30代/今川在住)  
パステルアート講師

化粧品メーカー勤務後、カラーセラピストとして独立。出産後、専業主婦を経て、現在は小学生の女の子と幼稚園に通う男の子を育てながら、パステルアートの講師として活動している。



高橋洋介さん(40代/美浜在住)  
会社員・美浜南小学校PTA会長・おやじの会

パート勤務の妻と小学生の娘2人の4人家族。東日本大震災をきっかけに、長女が通っていた幼稚園で『おやじの会』を結成し、小学校入学後も活動を継続。今年度からPTA会長に。

子どもたちのために  
父親も地域での  
つながりを

地域に母親のネットワークはありますが、父親にはない。震災時にそう強く感じて、おやじの会の立ち上げに参加しました。PTAは当初、関わるつもりはありませんでしたが、“人から頼まれたらできるだけ受ける”が信条で、縁もあって会長を引き受けました。おやじの会もPTAも、根底にあるのは「子どものため」。子どもの環境、地域や社会が良くなるためならできることはしたい。自分も楽しみながら。

仕事大好き人間で、毎日の帰宅時間は早くありませんが、活動する時間は作れます。残念なのは、たとえば週末に小学校の排水溝清掃をすると、参加者のほとんどが母親だということ。もっと父親にも参加してほしい。役員や会員にならなくても、こういう活動に参加することで地域でのつながりができれば、子どもたちにとっても良い環境になるはずですから。

クラスみんなが  
協力し合える  
行事を



中内紅葉さん(10代/市川市在住)  
県立浦安高校 生徒会長

小学校入学時に市川市へ。共働きの両親と、兄2人。昨年11月の生徒会長選挙では、同じ高校でバスケット部長だった次兄が推薦人を務めてくれ、当選。将来は「アニメに関わる仕事に就きたい」。

小さな頃は兄の友だちの男の子たちと一緒に遊ぶことが多かったですね。その影響もあるのか、私もクラスでも生徒会でも男女関係なくみんなと仲良く、毎日楽しく過ごしています。

生徒会の仕事で大切なのは、クラス全体がまとまって協力し合えるような行事を企画していくこと。そのために生徒会のメンバー7人で一生懸命考え、発信していかなければなりません。大変なこともあります。やりがいがあります。

これまでの生活で男女の区別や不平等を感じたことはありませんが、テレビ番組などでメイン司会者が男性で、アシスタントが女性ということが多いのは不思議だなと思います。メインが女性、アシスタントが男性だったら、また違ったものができるんじゃないでしょうか。



鈴木麻斗さん(20代/北栄在住)  
NPO法人Medical G Link代表・理学療法士

幼い頃から女性としての自身の体に違和感があり、10代で性同一性障がいと認定。21歳でホルモン治療を開始し、2年後に性適合手術を受ける。26歳で戸籍を男性に変更。

男とか女ではなく  
家族として

心と体が一致していない僕にとって、制服で男女の区別をつけられてしまう中学・高校の頃はとても苦しかった。学校ではいじめられ、家族に相談もできず、何度も死にたいと思っていました。

男性として生きようと覚悟を決めた高校生の時、家族にカミングアウトをしましたが、しばらくは理解してもらえませんでした。特に母は認めたくなかったようです。それが、震災後にやっと家族が揃った時、母が「男とか女とか関係ない、元気でいてくれたらいい」と言ってくれて、2人で号泣しました。今の名前も母が考えてくれて、本当にうれしかった。

今は僕と家族の経験を生かして、講演会などの活動を行っています。特に子育て中の方々に、LGBT※について知っていただきたい。そのための活動の場を広げていきたいと思っています。

※LGBT…レズビアン(女性の同性愛者)、ゲイ(男性の同性愛者)、バイセクシュアル(両性愛者)、トランスジェンダー(心と身体の性が一致しない人)の頭文字であり、性的指向又は性自認における少数者を表す総称のこと。

ケーキ店やホテルに勤務していた夫が昨年10月、自分の店を浦安市内にオープンしました。万が一、失敗してもやり直しがきくようにと、独立するなら早くして!とっていました。収入は確保しておきたいので、私は会社勤めを続けています。

夫の店で小売業に携わることで、アルバイトの子たちに“インスタ映え”する撮影方法を教わるなど、これまで知らなかったことをたくさん経験させてもらっています。

夫は店を持つ前は積極的に家事をしていたのですが、今は無理。私1人で全部は手が回らないので、家電を駆使しています。子どもたちも成長してきたので、家族みんなが無理なく少しずつ手伝い合えればいいかな。また、近所の友だちや市や民間のサポートにもお世話になりながら、家族で元気に過ごしたいです。

みんなが  
少しずつ手伝い  
合えばいい



藤田敦美さん(40代/高洲在住)  
会社員

今春から長男は小学5年生、長女は1年生に。電機メーカーに勤務しながら、週末は夫のケーキ店の手伝い、マンションの管理組合理事長の仕事と、フル稼働の毎日を送っている。



北森邦彦さん(70代/弁天在住)  
うらやす市民大学 学生会代表

浦安市在住37年。69歳で仕事をリタイアし、うらやす市民大学に入学。現在、少子高齢化問題に取り組んでおり、「市と協働で浦安を、若い人が暮らしたいと思うまちにしたい」。

社会でも家庭でも  
男女平等に

企業を退職するまで、家のことは妻に任せっぱなしで「俺が稼いで養っているんだ」という会社人間でした。しかし、市民大学で多くの人と出会い、学んだことで、地域や家のことを何も知らなかったと気付きました。家事をしている仲間に触発され、

妻に指導を仰ぎながら、料理、掃除、洗濯と、なんでもチャレンジ中。毎日、家事が奥深く大変な仕事だと思知らされています。

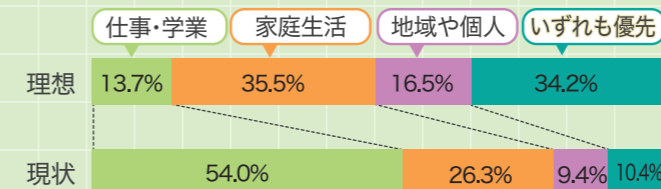
地域で活動している女性たちは、発想が豊か。凝り固まった考えでは解決できない課題を、柔らかなアイデアと広い視野で乗り越えていく。仕事に加え、家事、育児、近所付き合いなど、さまざまなことをやってきたからこそなのでしょうね。

私の孫は男女共に家の手伝いをしています。孫たちが大人になる頃には、真の意味で男女が平等に活躍できる時代になっていると期待しています。

## 市民に聞きました！ 日常生活において優先したいことは

「男性は外で働き、女性が家庭を守る」という性別による役割の固定化がみられます。「仕事・学業」「家庭生活」「地域や個人」のいずれも優先したいという人は、男女ともに30%を超えています。現状は10%程度にとどまっており、理想と現状に開きがあります。

### 【男性】



### 【女性】

